

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No. 129



**1982 AUG.**

**日本ヒマラヤ協会**



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン (7,135m)

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとりた確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行っており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実施している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- 1977年 タルコット (6,099m)  
(JACに協賛して行なった)
- 1978年 ヌン (7,135m) 4名登頂  
トリスルI峰 (7,120m) 6名登頂  
II峰 (6,690m) 7名登頂
- 1979年 キャシードラル (6,400m) 6,000mまで

- 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831m)  
19名登頂
- 1981年 ナンダ・カート (6,611m) 事故のため断念
- 1982年 クン (7,077m) 現在準備活動中

## 実施要項

- 目的** ①ヌン (7,135m) 登頂  
②高所登山の基礎修得
- 時期** 1983年7月末～8月末 (35日間)
- 負担金** 71万円 (航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員** 20名  
インストラクター4名 (医師含む)
- 申込み** 1982年11月末までに下記宛に申込みこと (資料を送ります)  
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号 日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、関西遊旅行が担当します。一般旅行業607号

## 表紙写真

禁断の地の幻の峰、ブリクティヘ向うべくムスタンのカクベニに入って振り返ると、背後にニルギリ北峰 (7,061m) の美しい峻峰が聳びえていた。  
(菊地 薫)

# ヒマラヤ No.129

1. **ヒマラヤ放談** ————— 高橋和之
5. ヒマラヤニュース (地域ニュース・トピックス・インフォメーション)
8. 《座談会》ヒマラヤ登山実践研究会を語る
13. 気象衛星 (ランドサット) 写真の利用 齊藤 隆
16. 高山病と高所生理学 (Dr. C・S・ハウストン講演) 西郡 光昭
18. **連載** VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM ⑤ 稜 朋 会  
ヒマラヤ閑話 ⑤4 ————— 水 野 勉
24. 事務局日誌・寸感

# ヒマラヤ放談

世界最高峰のエベレストの頂上で、然も、厳冬期にネパール側からと中国側からの初のランデブーを試みるという遠大なプロジェクトが進行している。

ヒマラヤも冬期登山の時代を迎え果敢な闘いが展開されるようになった昨今ではあるが、冬のヒマラヤの課題はまだ多い。

今回は、ネパール側の隊長を務めるカモシカ同人代表のダンプさんこと高橋和之氏に冬期ヒマラヤ登山に向けての装備の工夫などを中心に伺ってみました。



## 高橋 和之

### 厳冬期エベレスト登山の萌芽

—— それでは、早速ですが冬期エベレストの発想あたりからお伺いしたいと思います。

高橋 '79年のダウラギリ縦走の後、次は8,000m峰の縦走と言うことで、HAJがカンチの縦走を目指したように我々もローツェからエベレストと言うのを考えた事があったんですが、その時点では、エベレストの現状から言っても縦走の許可は出来ないとわれ、それで冬期エベレストと言う事に変えたわけです。

—— カモシカ同人と言うと '75年のダウラIV峰からダウラの縦走そして今年のダウラ主峰と「ダウラのカモシカ」と言うイメージが強いのですが、その辺の絡みはどうなんでしょうか。

高橋 確かにカモシカ同人がダウラ山群を総ナメにしてきたことからみれば、この冬のエベレストは飛び出したような感じですけど、それは僕としては単純明快なんですね。エベレストが一番高いと言うだけなんです。登山は変な理屈を付ける必要がないと言うのが僕の持論ですからね、僕は一番高い所へ立ってみたい、そして、どうせ立つなら一つのテーマを持って立ってみたいと言うのが、冬期登山だったわけです。

それと、やっぱり国境の両方から狭んで登ってみたい、みんながトライしてもなかなかやれないことをやっていきたいと言うのがあって、政治情勢的にも非常に良いタイミングにあるし、我々の立場上から言っても中国とネパールが非常にタイミングが良いと言うことで両方の許可を取ったわけなんです。

—— 時期は '83～'84年の冬と言う事ですが、'83年のポスト期には確か、カモシカ同人でローツェの計画も出ておりましたネ、このへんの関連はどうなんでしょうか。

高橋 タクティックスを考えていく中で、ネパールの気象条件を考えると、同じ冬でも12月と1月では非常に格段の差が生じる。今の我々の資料の中で1月の登頂は非常に難しい、今迄の遠征隊の資料をみても極端に1月に入ると悪くなり、そして2月になるとまた落ち着いてくる。こうしたデータを踏まえて12月に登るためには、高所順化と言うのが非常に問題となるので、この高所順化をかねてポスト期の中でローツェを登ろうと言うわけです。まあ、隣の山ですから地形的な慣れとか偵察もかねられますね。

連続して2つのピークをやることは非常に体力的に人間の極限のものを求められると思うんです。

疲労の問題などがね……でも僕の考えだとその中でやれなかつたら当然、12月から1月にかかる登頂はもつと困難だろうと思うんですね。この2つのピークをやることの方が見通しとしては可能性が非常に大きくなると思うんです。決して冒険でもないし、タクティクスを組む中で今、我々がやれる範囲の中では一番理想的な形になるのではないのでしょうか。

只、ローツエはあくまで高所順化とか偵察と言うのではなく必ず登るという考えでいます。ローツエの方は、今の僕の構想では6~7人位の少数精鋭で考えており、そしてそのメンバーは100%エベレストへ行くよう考えてます。

—— そうしますとエベレストの陣容の半分は、ローツエで下ごしらえをすると言うことですか。

高橋 ネパールヒマラヤの厳冬期に於いては12月1日からでなければその登山活動をしてはいけないと言うルールがありますから、12月以内に登ろうとすれば、どうやってタクティクスを組むにしてもある程度順化が出来上がったことが前提となりますからね。

—— ローツエ隊のメンバーは、一旦、カトマンズ辺りまで戻って休養を計るのですか。

高橋 カトマンズまたはエベレスト・ビュー・ホテルへと考えてます。カトマンズへ降りる人もいでしょうし、完全にリラックス出来る場所で半月なり1ヶ月休養しようと言う考えです。

—— ここ3年間のネパール・ヒマラヤの冬期登山をみても冬期の場合は、特に気象条件に大きく左右されることが多いようですが、冬期登山の勝算としてはどのように考えておられますか。

高橋 昨年の植村隊やポーランド隊を調べてみても、どんなに悪いと言っても12月中の天候の悪さと言うのは、かえってポスト期後半の天候の悪さよりは良いですね。

やはり、一つの課題としては少人数でアルパインスタイルで登るか、それともきちつと訓練した人達が非常に早いスピードでタクティクスを組んで時間をかけないで登ると言う形でなければやはり、冬期登山と言うのは時間をいわずらにかけると体力の消耗とかい로운意味で厳しいんじゃないんですかね。

## 冬期ヒマラヤの装備開発

—— 冬のエベレストに向うにあたつての装備開発についてお話しを伺いたいと思いますが。

高橋 装備については、風と寒さから守るためには、行動中の装備と休息する時の装備に分けることが出来ると思うんですね。

まあ、一つには睡眠中と言うと一番のポイントとなるのが今迄の隊をみているとテントだと思うんですね。そう言う点では今のエスペースをもつと改良したものを試作してます。

—— エスペースは「柳に風」のような柔構造のテントですが、これ迄に報告されてるような冬期の強風下での使用はどうなんでしょうか。

高橋 あのね、剛性でもつて力に答えようとするには非常な重さと複雑な骨組みがなければ不可能なんですね。建造物をもみてもそうでしょう。例えば、高層ビルは非常に固いような気がしますけれどもあれは全部、「柳に風」の考えで地震や風に対して抵抗しないで力を逃がしていくと言う考えですね。テントでも逆に言えばそう言う柔軟性で、とは言ってももう少しハードにしてですが、ある一定以上の力が加わつたら自分に変形して力を逃がすと言う構造にしないとやはり、剛性だけに求めたらこれは根本的に大きな間違いだと思いますね。

—— 昨年、冬のアンナに出かけた坂下さんは、特注のエスペースを持参したと聞いておりますが、同じ様なタイプを考えられているのですか。

高橋 坂下君はノーマルと特注のエスペースの両方を持っていたのですが、ノーマルの方はやっぱり、40~50mの風となるとフレームが顔につくぐらいになって非常に不安だったと言ってます。もう一つの特注と言うのは、前に南極で三浦雄一郎さんなんかが使った6本ポールのエスペースで非常に風に対して強かったと報告されてますが、今回ののもつと改良したタイプです。

つまり素材的には同じですけど、もつと力がかかった時にそのロス無くする骨組にしているわけです。もつと単純で建てやすく風強いと言うテントですが、もうテスト段階では何回か試作してテストをしております。実際には、このテン

トを今度の保男君（註：加藤保男氏）が1人で行くエベレストで使ってもらつつもりであります。

—— 昨年、初冬のナンダ・カートでも燃料の熱効率の悪さに苦勞させられました、その辺のところはいかがでしょうか。

高橋 EP Iなどのガスを使う予定であります、自分で出す熱をまたカートリッジの方に還元する方法を考えてます。これは、前に僕達がヨーロッパへ行つた時に向うのクライマーに教わつて使つた方法なんですけどね、オイルの空缶の様なものの中にキャンピング・ガスを入れて、横にある程度危ないですから熱が逃げるようにしてやると熱効率が全然違ってくるんです。自分でもつて出した熱によつてまた、まわりを熱めてやる方法です。単純なんです、余り難かしいことを考えないでその辺のところから考えたいと思つてます。

—— 寝具などはどうでしょうか

高橋 例えば、この羽毛の特性と言うのがありますね、羽毛は、肌に近い方が効果があるんです。ですから中を羽毛にして外を化学繊維にするとか、そう言うダブルの方式を使つた方が羽毛の特性が良く出るわけですね。ですから、羽毛の量は一定にしておいて、その上に化学繊維の綿でダブルにしたものとかね。

これは衣類でもそうですが、基本的な考えかたと言うのは、一番外側はゴアテックス素材のような薄いものでまず、外気をシャットアウトする。その次に何層かにわけて保温性と言うものを考えていくと言うことですね。

—— 望ましい重ね着スタイルはどんなものでしょうか。

高橋 僕達はね、わりと動物性繊維に固執しているものがあります。今、我々がフィーリング的に考えてますのは、肌はカシミアが非常に良いだろうと言うことですね。それで、あとは何層かづつに考えてます。これは、日本の冬山でもそうですが、1枚のもので解決するのは避けるべきですね、やはり一つづつ層を作つて温度調整が出来るようにしていこうと言うのが我々の考えです。

一番熱が逃げるところは、下から言つて足首ですね、ものの継目が一番弱点になるわけですが、いわゆる足首や手首、首すじなどを疎かにすると

そこがやられないで、末端がやられるわけですね、そこから一番近い末端がやつぱり一番影響を受けるわけですからそのへんのところの工夫が大事だと思います。

## チタン製ピッケル

—— 手・足の装備はどのように考えてますか。

高橋 足にしてもね、我々はトータル的にみても、アイゼンから見直しているのです。今迄の遠征隊では、せいぜい進んだ隊でも固定式のアイゼンバンドですが、固定バンドでは締めつけからくる血行の悪さとか着脱の不便さなど非常にあるわけですね、それを、まず、我々はワンタッチを大前提としてやるつもりです。まあ、ワンタッチにするとオーバーシューズが履けないと言うマイナス面がありますが、こんどは逆にワンタッチ式が大前提ですから、それで履けるオーバーシューズを今開発しているわけです。

それから靴ですけどね、僕達も今、プラスチックと皮靴を両方テストしております。プラスチックブーツのメリットは非常に軽いということですね、軽いと言うことは極端な言い方をすれば、皮と同じ重さにもつていけば皮よりはるかに保温性を出せるんだと言うことですね。プラスチック・ブーツだけでは、まだまだインナーブーツの素材とか形状に問題がありますんで、あのプラスチック・ブーツを生かしながらもつとインナー・ブーツを改良したり、オーバーシューズを改良することによつてそれほど大きさにしなくとも今まで以上の保温をはるかに越えたものを作る自信はあるんです。軽いと言う事は、重く出来ると言う発想でいけば良いと思うんです。

—— 手の方はいろいろと制限があつて難かしいと思いますが。

高橋 そうですね……只、ピッケルがありますよね、僕達は普通ピッケルの頭部を掴んで登下降しますが、あの金属部からの放熱は大きいんです。そこで、熱伝導が悪くて低温脆性がないチタンを素材にしたピッケルを作つてこの金属部からの放熱を防ごうと考え、すでに試作は終つております。

もつとも、このチタンは軽いと言う特徴があつてカモシカでも3~4年前から登攀具を試作してありますが、アイスハーケンなどもこのチタンを使い

ことよってかなりの軽量化を計ろうと考えてます。

## 客層に観る登山の大衆化

—— ダンプさんが山に憑かれるようになったのはいつ頃からですか。

高橋 17才の時に登山に入ってからですかね。丁度、登山が出来た年だったと思いますが、1人で山へ行きはじめた頃、新聞を読んでたら出ていたんで丁度いいやと入って、それからずーっとです。

—— ダンプさんを見てますと商売の方も山の方も着々とより大きくなってきてますが、そのへんのエネルギーな活力についてお聞きしたいですね。

高橋 僕なんか山はそれほど登ってませんよ。只、仕事は一生懸命やってますよ、いろんなものを僕は生み出しているつもりだし今の日本の登山界の中で認められるようなもの、例えばエスペースのようなものを一つの小売店が残したと言う歴史は何もないですから、そういう点では僕は一生懸命やってるわけでこれからもそのつもりです。

只、仕事の発想と登山のプロデュースは、ある意味では同じことですから、僕は、自分が登る事以上にプロデュースすることが好きですからね、そういう割とユニークな登り方と言うか発想と言うものを商売でも一つのモットーにしています。

僕は自分の登れる実力よりもそう言う人達と一緒に行ってプロデュースをしていくと言う方がどっちかと言うと楽しさがありますね。

—— ダンプさんが今の登山用具店を始められたのはいつからですか。

高橋 16年前にオープンしましたから昭和41年ですか。

—— 昨今の登山界はいろんなジャンルに分割されるように感じますが、来店される客層の変遷はいかがでしょうか。

高橋 来店されるお客さんをみると昔以上に楽しいですね。僕は、あんまりアルピニズムはあるべきだと言うのは嫌いな方なんです。強いて言えばね、登山は自分の好みであって自然破壊とか一つのルールさえ基本的に守ってればね、自分の味つけでもって自分の好みの形態を選んで、登る手段を選んでもいいと言う基本的な考えをもってますからね、フリー化と言うかボルダリングと言うかそう言うものも一つの自然の親しみ方だから俺はこれしかやらないんだと言う人がいてもそれはそれでいいだろうし、そう言う点では広がりが出たと言う気がします。

年配の方も非常に増えてきてるんですね。特に50代後半の奥様とか、まあ、男女を問わずですがね非常に目立ってきてます。片方では、中学生・高校生の若い人が非常に増えている。これは登山が大衆の中に非常に良い形で広がってきていると思うんです。都会が過密化していけばいくほど自然に親しむことが大切なことだし、それといろんな自分の好みで味つけた登山というものはもっと生まれてきていいと思います。

—— 最後にカモシカ同人のポスト・エベレストのプランはどんなものを考えられていますか。

高橋 今度の冬のエベレストが終わったら、ダウラギリ山群で残っているチューレンヒマールなど向うの方を全部登って一応、地域研究的な夢を完結したいと思っています。それが終わったらカモシカ同人は解散してもいいんじゃないですか。

—— 本日は、どうも忙しい中ありがとうございました。

(インタビュー構成 尾形好雄)

## 「インド・ヒマラヤの手引」第二版発行のお知らせ

2月に発行致しました「インド・ヒマラヤの手引」第一版は、御陰様で皆様方よりご好評を戴きまして5月早々に完売となりました。

其の後も、引合が多いため第二版を発行すべく準備中でありましたが、此の度、漸く再版の運びとなりました。

尚、第二版の発行にあたりましては、インド・ヒマラヤ登山規則の和訳や遭難事故に遭遇した場合の事後処理など15頁の増加となりました。

(頒価1冊1800円 送料240円、申し込み先はH A J事務局まで)

## 地域ニュース

### 〈ネパール〉

#### 登山隊の無線機、ウォーキー

##### ・トーキーの使用許可規定について

このほどネパール政府観光省は、登山隊の持参する無線機、ウォーキー・トーキーについて下記のように規定する旨、発表があった。

#### 記

- (1) 登山隊には2台の無線機と12台のウォーキー・トーキー(携帯用無線機)の持参を認める。
- (2) ウォーキー・トーキーの許可される周波数は26968 MHzと26976 MHzのもの。
- (3) 無線機の許可される周波数は3872、388 MHzと7305 MHzのもの。
- (4) 無線機とウォーキー・トーキーのどちらも発振子(周波数)は固定したものでなければならない。
- (5) 若し、無線やウォーキー・トーキーの周波数が固定されたものでない場合は、登山隊は専門のリエゾン・オフィサーを随行しなければならない。(註)この通達をみると最近、多く用いられるようになった144MHzのトランシーバーは使用出来ないことになり、またB・Cに設置する無線機も従来のような35~28 MHzまでのマルチ・バンドを使用する時は専門リエゾン・オフィサーを随行しなければならないことになる。

### UIAA総会開催日程が決る!!

第44回の国際山岳連盟(U I A A)の総会は、U I A Aの50周年記念と合わせて今秋、カトマンズで開催される。

このほどホスト国のネパール登山協会(NMA)より開催日程が発表となった。

開催期間は10月10日から16日までの1週間。国際シンポジウムの他、いろんな催しが組まれており、今秋のカトマンズは'78年のサガルマータ25周年記念行事のような国際アルピニストで大層賑いそうである。

### 〈パキスタン〉

#### 登山局長・アワン氏退任!

6月のはじめにパキスタン観光省の登山局長が代りました。長い間、登山局長だったアワン氏は退任され新しくムニール・ディン氏(MUNEER DIN)が就任されました。

尚、次局長のタリムハマッド氏はそのまま留任です。

#### 今年のパキスタンの日本隊は7隊

ガツシャブルIV峰(7980 m) 静岡登攀クラブ

勝見幸雄隊長他9名

ハッチングダールキッシュ<sup>\*</sup>(7163 m) 金沢大学山岳会 東保幸隊長他10名

パスピーク(7284 m) 諏訪山岳会 成田俊夫隊長他7名

ボイオハダール・ドウアン・アシールI峰<sup>\*</sup>(7329 m) 東京朝霧山岳会 植田宗男隊長他6名

K7<sup>\*</sup>(6934 m) 鷗翔山岳会 保科正之隊長他6名

クンヤンキッシュ(7852 m) 華奈婆同衆 中村五十夫隊長他7名

ドフィンギー<sup>\*</sup>(5941 m) 華奈婆同衆 譲原正幸隊長他6名

サラグラール(7349 m) 岩手水沢山岳会 辻山健一郎隊長他7名

(米印は未踏峰)

### 〈インド〉

#### ヒマラヤ8000キロ縦断の帰国談

インド陸軍の4人の登山隊が17ヶ月がかりでヒマラヤ山脈8000キロの縦断に成功したことは、ヒマラヤ128号で紹介したが、今回はその帰国談を紹介する。

H・Sコリ大尉(28)を隊長とする同隊は去年1月、ヒマラヤ山脈東端のアルナチャルブラデシを出発。48ヶ所にのぼる5000~6000 m級の峠や24の水河を踏破してエベレストからK2山麓まで歩き、先月、カラコルム峠にゴールインした。

途中、各地で半ば雪に埋もれた登山者の遺体につまずき何体もみつけたが、「私たちが毒ヘビや山ネコ、野生馬や雪崩に襲われて遭難しかけた」。

「自分たちが見た素晴らしさは口では表現できない」と言うが、雪男だけは見なかった、との事。

(6月18日 朝日新聞)

## 〈中国〉

### 女性は高山にも強し!!

心臓肥大や赤血球の異常増加などの症状を示す高山病には、男性より女性の方がかかりにくく、女性ホルモンがこれに有効な作用を果たしている、とする研究報告がこのほど中国で明らかにされた。

青海省西寧市の高山心臓病研究所の研究によると、海拔3800mから4200mの高地では、男性より女性の方が適応力が早く、急性、慢性の心臓病にかかる率は男性の方が高かった。

また高地並みの低圧実験室にモルモットを入れ、一方には女性ホルモンを、他方に男性ホルモンを注射した実験結果でも、女性ホルモンを注射されたモルモットの方が適応力が高いことが分かり、同研究所では、高山病の治療に女性ホルモンを使う実験を始めている。

(6月25日 読売新聞)

## トピックス

### ブリクティ隊帰国す!!

すでに機関誌でも速報しましたが、今春、ネパールのダモダール・ヒマラヤの幻の未踏峰へ出かけてました当協会のブリクティ隊は、初登頂をお土産に6月15日、19日、20日に分かれ相次いで無事帰国致しました。(尚、高橋、佐久間両隊員はまだカトマンズへ居残っております。)

知られざる禁断の地の山につきましては次号ヒマラヤでも特集を組んでお届けしたいと思います。

7月11日(日)午後6時からのTBS報道特集でこのブリクティ遠征の記録が放映されることになっておりますが予告が間に合わず残念に思います。

### '82年クン登山学校隊

#### 急性高所暴露試験を実施す!

先発の出発迄あと1ヶ月に迫った'82年クン登山学校隊は、去る6月14日(月)、立川航空医学実験隊のご好意により低圧チャンパーでの急性高所暴露試験を体験した。

当日は勤務の都合などもあって山森隊長他10名が参加して6000mの高度を垣間見てきた。

試験は、まず高所暴露についての一般的な基礎講義を聴講したあと、低圧チャンパーに入室し、0mから順次3000m、4000m、5000m、6000mへと減圧されそれぞれの高さで心拍数、数字カードによる思考力テスト、爪、唇のチアノーゼなどによる外観チェックを行ない高度とはいかなるものかを体験した。

## インフォメーション

### 東京集会のお知らせ

東京集会のお知らせ

7月の東京集会は、先にご案内しましたように日本・ブータン協会事務局長の小方全弘氏に講師をお願いしまして「最近のブータンを語る」テーマをもちたいと思います。

会員の皆さん、友人などお誘いの上是非お出かけ下さい。

日時 7月16日(金) p.m 6:30~

場所 HAJルーム

## 新刊図書一覧

- 日本百名峠 井出孫六 桐原書店 4月23日
- ネパールの人びと I D・Bビスタ 古今書院 4月27日
- '82ファミリー・キャンプハンドブック 岡本昌光 草思社 4月27日
- 日本登山大系⑩関西・中国・四国・九州 柏瀬祐之他編 白水社 4月27日
- 中・高年向きの山-100コース関東編- 浅野孝 山と溪谷社 4月28日
- 喪われた岩壁 佐瀬稔 山と溪谷社 4月28日
- スイスの山々 岡沢祐吉訳 オレル・フュスリ社 4月28日
- 万葉の山をゆく 新井清 ナカニシヤ出版 5

月1日

- ・森の狩猟民 市川光雄 人文書店 5月7日
- ・シルクロードと日本文化 森 豊 白水社 5月7日
- ・(空撮登山ガイド⑦) 燧・至仏・尾瀬が原10コース 白旗史郎・大森弘一郎 山と溪谷社 5月7日
- ・「辻まこと山の画文「岳人の表紙の画と言葉」辻まこと 白日社 5月7日
- ・雪嶺秘話 爪生卓造 東京新聞出版局 5月10日
- ・花遊び十二ヶ月 楠目ちづ 山と溪谷社 5月1日
- ・野外料理入門 日本レクリエーション研究所 泰流社 5月1日
- ・野の花③ 大場達之 山と溪谷社 5月12日
- ・全集 日本動物誌① 今西錦司也 講談社 5月12日
- ・昭和写真全仕事 白川義員 朝日新聞社 5月15日
- ・登山ミニ百科 岳人編集部 東京新聞出版局 5月18日
- ・山の雑学ノート 岳人編集部 東京新聞出版局 5月18日
- ・アフリカよ、キリマンジャロよ 池本元光 サイマル出版会 5月21日
- ・私のスイス 犬養道子 中央公論社 5月22日
- ・野の花だより 田中愛行他 山と溪谷社 5月22日
- ・雪嶺秘話、伊藤孝一の生涯 爪生卓造 東京新聞出版局 5月22日
- ・日本民族のふるさとを求めて 森本哲郎 朝日新聞 5月24日
- ・自然有情 足田輝一 草思社 5月25日
- ・山の緊急判断手帳 大谷映芳 山と溪谷社 5月25日
- ・秘境のキルギス・シルクロードの遊牧民 藤木高嶺 朝日新聞社 5月26日
- ・花紀行2・北アルプスの花 布施正直 文化出版局 5月29日
- 花紀行3・富士山の花 イズミエイコ文化出版局 5月29日

- ・山里の詩・奥武蔵 根津富夫 さきたま出版会 5月29日
- ・遙かなるクン 杉並勤労者山岳会 5月31日
- ・ヨーロッパアルプスの旅 大学生協事業センター 6月3日
- ・冒険家の森・サバイバル技術教書 C・W・ニコル、田淵義雄 クロスロード 6月3日
- ・緑の生活 オーク・ヴイレッジ、稲本正、角川書店 6月3日
- ・気象衛星「ひまわり」の四季 飯田陸治郎・渡辺和夫 山と溪谷社 6月4日
- ・季「SEASONS」 富成忠夫 東京エディトリアルセンター 6月7日
- ・森のクラフトマン 小林侘史・典子 JICC出版局 6月8日
- ・日本アルプスの登山と探険 ウォルター・ウェストン 大江出版社 6月8日
- ・エゾシカ「雪原に群れる」 窪田正克 平凡社 6月8日
- ・尾瀬霧幻 麻賀進 誠文堂新光社 6月9日
- ・北海道花の散歩道 北海タイムス社 6月9日
- ・源流は呼んでいる 西野喜与衛 岳書房 6月10日
- ・花のみちのく 光書房 国際情報社 6月11日
- ・蝶の島 三木卓 桐原書店 6月15日
- ・朝日連峰 阿部幸作 高陽堂書店 6月15日
- ・ツンドラから氷河へ 都庁山岳部 6月15日
- ・山頭火人形と山日記 藤津滋生 檸檬社 6月16日
- ・日本登山大系⑨ 南アルプス 柏瀬祐之他編 白水社 6月16日
- ・全集日本動物誌② 今西錦司他 講談社 6月17日

## ら・もんたあにゅーすばらしき山々

日本山岳会写真協会の企画編集による写真集。101枚の写真(A4判)と解説13頁。素敵なアクリル製の額が付いております。〔出版科学総合研究所刊、定価6,500円、連絡欄出版科学総合研究所

# ヒマラヤ登山実践研究会

— その理念と運営について —

出席者 山森 欣一 尾形 好雄  
中岡 久 関 久雄  
(司会) 角田 不二

本誌126号でその発足が公表されたヒマラヤ登山実践研究会 — そのグループの実態とは何なのか? いや、どうあるべきなのか。とりあえず集ったメンバーでその理念や運営について一夜話し

あつてみた。とにもかくにもHAJ・EXPEDITIONの原動力となる夢多きグループはもう始まっているのだ。

設立の趣旨は3つあるが……

角田 ヒマラヤ登山実践研究会というグループをHAJ内に発足させようという呼びかけが山森さんを代表発起人として為されたわけですが、今日はとりあえず集ったメンバーで、グループの理念や運営についてざっくばらんな意見を出してもらいたいと思います。呼びかけそのものは本誌の126号に掲載されていますが、ああいう改まった募集広告でもうひとつピンと来ない部分もあるように思います。最初に言い出しつぺの山森さんから座長というような形で意見を出してもらいたいと思います。

山森 ヒマラヤ登山実践研究会という名称はまだ仮称なんだけど、その真意は大別して三つあります。ひとつはヒマラヤに登るという行為を追求するための、あるいはしていくなかでのメンバーの結集。これを永続的にやっていきたい。ただし必ずしも自分たちが登りたいから集めるという発想ではない。HAJには北海道から九州まで様々な人がいるわけだけど、能力も情熱もありながらEXPEDITIONの場を持たない人が多勢いる。そういう人たちのために「場」を設定し、プロジェクトを推進していくメンバーを結集しようというものです。そういうなかで登るという行為を追求していきたい。

二つめには山ヤとしてひとつの主張を持つグループにしていきたいということ。たとえば私個人が感じていることだけど、最近国内の冬期登攀が割合に軽視されている。一方ヒマラヤでは高所順応やそのための訓練方法などが非常にクローズアップされてきている。しかし、ヒマラヤは高所順応だけで登れるわけではない。そういう時代の中で私は敢えて『登山者をもっと国内の冬期登攀の経験を積むべきだ』と提唱したい。ヒマラヤ登山実践研究会では、そういうような様々な問題を指摘しつづけていく団体でありたい。

三つめはHAJの内部事情に関連してくるけど、かつてのEXPEDITION研究会というグループがカンチを推進していくなかで協会そのものの運営の主要メンバーになってしまったということがある。しかしHAJというのは登山だけをやっている団体ではない。かなり多種多様な目的を持つ団体であるわけで、今やかつてのEXP研の中心だった稲田や私は協会の運営の核ではあっても、登山行為推進の核とはなり得ない。これからは協会運営とは少し離れた場でHAJにおける純粋な登山行為を推進していく人間がどうしても必要なわけです。そのための組織でもある。

角田 要約すると、①機会と場の設定によるメンバーの結集、②オピニオンを打ち出していくグ

### 山森 欣一 (38才) 一男一女の父

HAJ事務局長 山嶺登高会々員 日山協海外登山常任委員 都岳連海外担当理事

(海外登山歴)

1975年 インド・ヌン(7135m)副隊長

1978年 カラコルム・ハチンダール キッシュ  
(7163m)副隊長

1980年 ネパール・カンチェンジュンガ  
(8598m)偵察 隊長

1981年 ネパール・カンチェンジュンガ  
(8598m)隊長

1982年 インド・クン(7077m)隊長

ループ、③かつてのEXP研とはHAJの変遷の中で出てきた必要性ということになります。話が散漫にならないようにひとつひとつテーマを区切って意見を出してもらいたいと思います。まず①からいききたいと思います。①の目的はやや登山学校と重複する部分もあるんじゃないかと思えます。機会と場のない人にそれらを与えるという部分は完全に重複します。たとえば今ここにいる中岡さんや関さんは登山学校を卒業してHAJにかかわりを持ち、この実践研究会の旗上げにも参加しているわけですね。

山森 いや、そりゃちょっと違う。登山学校の理念はNEXT EXPEDITIONを自ら行なえる人間の育成ということが最大の眼目であって、必ずしもHAJのEXPのためにメンバーを集結しようというものではない。とにかくノウハウを学んでもらって、将来の自分自身の計画に生かせるようにということです。ただ現実には登山学校に来る人が全部そういう人というわけではないけど。

### とにかく仲間が必要

中岡 登山学校っていうのは、とにかく一度はヒマラヤ登山をしてみたいという人が来るケースが多いんじゃないですか。登山学校で学んだノウハウを自分の会に持ち帰って、次は自分の会の遠征をやるといふ人はパーセンテージとしては少ないですね。

角田 その辺の理念と現実のくい違いは実践研

究会でも充分予想できる。いや、むしろそうなる危険性のほうが多い。たとえば来年チョー・オユーへ行くとか、85年にK<sub>2</sub>へ行くとかする。メンバーは集るでしょう。そして新たに8000mのサミッターが生まれるでしょう。ところがそのサミッターは「バンザイ、俺も登った」というわけで、あとはさっさと引退して実践研究会なんぞにはかかわらなくなる。こういう人は当然出るでしょう。そういう意味では現実的には実践研究会は登山学校でやってることをレベルアップしただけで、性格的には似たようなことになるようにも思われます。実際にかつてのEXP研がそうだったんですから。

山森 EXP研は初期の段階ではかなり高度な純粋な研究グループだったんです。ところが現実的にEXPを実践しはじめた時からメンバー補充のためにいわゆる肩たたきをするようになった。その結果として角田が言ったような性格になっていった。だけど今度の実践研究会は最初から実践のための団体なんだから、肩たたきを恐がっていたらどうにもならない。重要なのは実践研究会の中でそれぞれの企画のチーフになる連中だと思ふ。

角田 まさかひとつひとつのEXPの隊長がミューサー的な一過性の人間なんてことはないでしょうけど、そこに集る人間たちは10人のうち7~8人までは一過性でしょうね。でも私はそれでもいいと思います。ひとつのEXPからたとえ1人でも2人でも核になり得る人間が出てくればそれだ

### 尾形 好雄 (33才) 妻帯者

HAJ機関紙編集長、雪と岩の会々員 日山協海外登山常任委員

(海外登山歴)

1974年 ネパール、ツクチェ・ピーク  
(6920m)隊長、登頂者

1978年 ネパール、ヒマルチュリ(7893m)  
隊長、西峰(7540m)初登頂者

1980年 インド、ケダルナート・ドーム  
(6831m)隊長、登頂者

1981年 ネパール、カンチェンジュンガ  
(8598m)縦走隊々長、ヤルンカン登頂者

1981年 インド、ナンダ・カート(6611m)  
捜索隊 副隊長

けて大変な意義がある。

山森 もちろんそれでいいでしょう。ただね、ここで私が言いたいのは中央集権ではダメだということ。たとえば酒田の連中が何かをやる。高知の連中が何かをやる、だけれども中央集権の中でやるんじゃなくて、彼らが独自でやる。その結果として、H A Jを土台として彼らが以後その地方のヒマラヤ登山の中心になっていく。これはH A Jにとっても彼らにとっても望ましいことだった。ただK<sub>2</sub>とかエベレストの場合は、そういうわけにはいかないけど。

関 ちょっと聞きたいんだけど、この実践研究会っていうのは8000mに照準をあわせてるの？

角田 いや、そんなことないでしょ。

関 あ、そう。ならいいんだけど。というのは僕なんか8000とかじゃなくて、未知の山をめざしていきたくて考えてるから、なんとなくピンと来なかった。

山森 山は逃げるんだよ。何故かっていうと、どんどんブッキングされちゃうから。そのために協会ではいろいろな山をおさえているけど、何もそれにとらわれる必要はない。いろいろな計画が出てくるほうが望ましい。

尾形 実践研究会の中で小グループ化というやり方は、方法論としては現実的だと思います。同一人物が8000もめざし、今回のブリクティみたいな山もやるというのはあまり現実的でないですから、片方で8000もやればまたもう片方ではH A Jならではの渉外能力で許可を取って出かけるような未知性の高い山、シッキムとかブータンみたいな所へ行く連中もいるというあり方がいいでしょうね。

関 ただ僕なんかねえ、割といろんなことをやってみたいという気があるんですよ。未知もやり

### 関 久雄 (31才) 妻帯者

H A J会員、神奈川大学II部W・V部O・B会々員

(海外登山歴)

1977年 インド、タルコット(6099m)

1979年 インド、マタブ(5280m)登頂者

1980年 インド、ビエンガパー(5972m)隊長

1980年 インド、ケダルナート・ドーム(6831m)登頂者

たいけど8000もやりたい気持もないわけではない。世界中あちこち出かけたいなんて気もあるし、年とったらカアちゃんの子供つれてそこそこの山登りもいいだろうとかね。

角田 とにかくいろいろな意味で仲間は必要ですね。これはヒマラヤに限らないけど。

中岡 常に登るためのパートナーを確保しておきたいという欲求はありますね。

山森 それは最も本質的な問題だね。

### 実践抜き理論はあり得ない

角田 さっき山森さんのほうから、ヒマラヤは高所順応だけで登れるわけじゃないという話が出ましたけど、確かにそうなんです。もちろん高所順応というのは高所登山では重要なファクターで、それ抜きにして高所登山はあり得ない。でもそれ以外にも重要なことはたくさんある。たとえば雪。私は去年ガンガブルナで雪というものの持つ恐ろしさをつくづく味わった。

尾形 ちなみに、ここ12年間でのヒマラヤの事故を分析すると、6割までが雪崩ですよ。高度障害のほうにむしろ少ない。つまりヒマラヤ登山における危険は自然的要因のほうが大きいです。原真さんの高所理論の中でもそのことはちゃんと言っている。この順応理論はあてはまる山とそうでない山があるとね。それは当然そうなんだけど最近の風潮として、特に若い人たちはジャーナリズムに影響され易いし、物事をかみくだいて整理して理解するという姿勢に欠けている。ジャーナリズムでクローズアップされると、すぐそれにワァッと飛びついてしまう。そうしないと時代に

### 中岡 久 (32才) 独身

H A J会員、東京白稜会々員、都岳連海外登山委員

(海外登山歴)

1978年 インド、トリスル(7120m)登頂者

1981年 ネパール、ランタン・リ(7239m)登頂者

乗り遅れるような不安を感じるんでしょうね。だけどその裏に隠された真理までは理解しようとしな。つまり体力科学も重要だけど、あくまでも登山の中の一部なんだということに気がつかない。山を見る、ルートを見るということの重要性は古くから言われているけど、もっともっと認識されなければならない。そういうことの指導啓蒙活動は確かにH A Jの役割のひとつでしょう。原さんの高山研究所の理論は確かに重要だけど、H A JはH A Jでまた違った観点からヒマラヤの危険を訴え、登山界をリードしていかなければならない。

関 原さんはその点について言うべきことはキチンと言ってるんだけど、読者のほうで大きく扱われている部分だけ鷓呑みにして、他の部分に眼がいかなくなるというのは由々しい問題ですね。

角田 結局ジャーナリズムのせいでしょう。ジャーナリストというのは常に新しいもの、時代に熱狂的に歓迎されるものを大きく扱い、というよりもそういうものを造り出そうとしている人種ですから。それに踊らされるクライマーがいるとしたら、それはクライマーのほうが悪いと言ってしまうばそれまでですが、そんなこと言ってしまったら日山協も岳連もH A Jも社会的な存在意義はなくなってしまいうんで、やはり地道な指導啓蒙活動を展開していかなければならない。でもこれはどちらかというと実践研究会じゃなくてH A Jそのものの仕事ですよ。

山森 もちろんH A Jの仕事だけど、ただH A Jがそういう仕事をするために実践研究会の活動が必要になってくるわけ。実践の裏づけのない理論に耳を傾ける奴なんているわけない。私は全国津々浦々話をして歩いてつくづく感じている。ヒマラヤ会議や何かで皆が私の話に耳を傾けるのは、私に実践の裏づけがあるからなんですよ。そして実践は常に新しいものでなければ説得力がない。時代の先端でなければならぬ。そういう意味ではいつまでも私が話をしていたんじヤダメなんで世代交代がなされなければならない。そのために実践研究会は必要不可欠なわけで、すぐれた実践をした人間が帰ってきていい話をしなければいけないと思う。

## H A J全体のバランスの中で

角田 最後にこの実践研究会のH A J内におけるあり方というか、どういう位置づけになるのかということを経過のE X P研や現在の事務局態勢のこともからめたくて話してもらいたいと思いますが。

関 事務局と登山の実践を分離させなきゃならないというのは、これはもう当然のことでしょう。

山森 ところがそれが難しいことなんです。山ヤっていうのはパワーがものすごいからね。意識しなくても結果的に山を一生懸命やろうという連中が協会の執行体制もやっていくということになってしま。う。

中岡 それはH A Jじゃなくて、一般の山岳会でもそうですね。会の中で一番バリバリ登ってる連中が会の事務局もやるというケースが多い。そうせざるを得なくなる。

角田 かって、まあ4年ぐらい前までですか、E X P研とH A J執行部はぜんぜん別だったんだよね。あの頃は事務局が名古屋の沖さんのところにあつて、E X P研は稲田さんが実質的な代表格であつて清水さん、西郡さん、山森さん、菊地さんあたりが主だったメンバーとして動いていた。あの頃執行部とE X P研はあまり仲が良くなかつた。仲が良くなかつたからこそE X P研は当時まったく独立した動きをとることができたのかもしれない

### 角田 不二 (29才) 独身

H A J 常務理事、明治大学駿台山岳部O・B会  
員 都岳連海外登山委員

(海外登山歴)

1978年 インド、トリスル(7120m)  
登頂者

1980年 ネパール、カンチエンジュンガ  
(8598m)偵察

1980年 インド、ケダルナート・ドーム  
(6831m)インストラクター  
登頂者

1981年 ネパール、カンチエンジュンガ  
(8598m) ヤルンカン登頂者

1981年 ネパール、ガンガプルナ(7455  
m)登攀隊長。

い。今度の実践研究会はそういう意味では事務局とベッタリだから中心になる連中がよほどしっかりとしないと事務局依存型になってしまうだろう。

中岡 沖さんから山森さんに事務局が移った経緯というのがよくわからない。

山森 社団法人化するということが契機だった。つまり沖さんは社団法人化した場合はつづけるのが無理だから稲田・山森が社団法人化をすすめるため事務局も引き受けようということになった。

角田 要するに山ヤのパワーですね。だけど協会の全体のバランスということがあるから、パワーばかりじゃ協会としては因る。

山森 やる気のある奴にとって、H A Jほど利

用価値のある団体ってないと思うね。実践研究会は連絡事務は事務局でやるとして、それぞれの企画のチーフになる連中はしっかりとやってもらいたいと思う。

角田 それぞれの遠征がスタートしていけば、それなりに形ができてくるでしょう。とにかく遠征が始まらなきゃね。

山森 そりゃもう実践研究会だからね。

中岡 そうするととりあえずチョー・オユーですか。

山森 あれもいろいろと大変だよ。その前にマナスルもあるけど。じゃあ今日のところはこんなところで……。

角田 どうもご苦労様でした。

## ヒマラヤ登山実践研究会旗上げ式挙行!!

去る、5月30日の日曜日に東京都勤労福祉会館において「ヒマラヤ登山実践研究会」の旗上げ式が挙行されました。

当日は、熱意ある研究会入会者が東北や四国などの遠方からも駆けつけ、盛り上がった旗上げ式となりました。

旗上げ式は、まず、参席者の自己紹介から始まり、続いて実践研発起人代表の山森氏より挨拶が行なわれた。

ライト・エクスペディションを研究しようと発足したEXP研の生立ちからラムジュン・ヒマール、バツラII峰、カンチエンジュンガ縦走と展開してきたEXP研の歩みについて話され、その上で何故、ここに新たな実践研究会を、の趣旨説明がなされた。(ヒマラヤ126号参照)

その後、具体的な実践研の運営についてディスカッションが行なわれ次のような事項が決定した。

### 1. 名称について

仮称だった「ヒマラヤ登山実践研究会」の名称が正式名称として決定した。

### 2. 集会について

実践研の集会は、年2回とする。

・H A J 通常総会の前日……5月

・定例会………11月

(定例集会は、日本百名山のある土地を原則と

して各地をまわる。)

### 3. 連絡について

実践研の月報を発行。

「研究会ノート」の回覧。

### 4. 運営費について

実践研運営費として年会費(4月～3月)3000円を徴収する。(月報印刷費、連絡費)

### 5. 幹事

当面の幹事として次の3名が選ばれた。

新郷信廣 尾形好雄 安部 誠

以上をもって実践研の旗上げ式は閉会となった。

(参席者)

山森欣一 尾形好雄 山田 昇 稲垣公平 飛田和夫 片岡邦夫 角田不二 小松 伸 小暮 孝 松本正城 山崎幸二 安部 誠 畠山 優 真行 寺栄一

### —現在、考えられてる目標山—

1982-83年 冬期マナスル(8156m)

1983年春 チョー・オユー(8153m)

1984年春 ゴジュンバ・カンI(7806m)

秋 チャマール(7177m)

1985年夏 K<sub>2</sub>(8611m)集中

1986-87年 冬期エベレスト(8848m)

※この他、サセル・カンリ、シニオルチュ、中国等。



### 3. 写真の入手と内容

ランドサットはアメリカのNASAで一定の軌道を通る様にコントロールされており、一軌道で巾185kmの帯状にデータを収集しています。

この軌道にはパス(PATH)ナンバーがつけられ、帯状のデータを一定間隔で南北に区切りたものにロー(ROW)ナンバーがつけられています。このパスとローの交点を中心として1枚の写真の地域を定め、これを1シーンと呼んでいます。

図1は、パス・ローを示すランドサット・カバレッジ・マップです。

希望する地域のシーンを入手する場合、緯度経度を参考にしてパス・ローナンバーを指定します。

各シーンの過去資料はマイクロフィルムで保存されており、各ポイントごとに表1で示すようなマイクロカタログが作成されています。

このカタログにある項目、たとえばデータ取得年月日、雲量(1シーン中の雲でおおわれている面積)、フィルム画質等考慮し希望する写真を指定します。

次にランドサットにより得られたデーターの価格表(海外の場合)を表2に示します。

写真の縮尺

#### ①MSS

70mm	1 : 3,369,000
240mm	1 : 1,000,000
480mm	1 : 500,000

(表一)

PATH115(DAY)ROY055(SOUTH)LANDSAT01/01/72TO12/31/78GEOLOGICALSURVEY,DEPT.OFTHEINTERIOR

S	C	C DIGIT							
A	IMAGE CL O	C QUAL							
DATE	T	SEN QUAL	L	MICROFORT	45678	CENTER	COORDINATES	SCENE	IDNS PATHROW
*****THE FOLLOWING DATA MUST BE ORDERD FROM THE EROS DATA CENTER*****									
06/18/77	2	MSS 5888*	40φ	B2200460796	N *****	N07D14M00S	E132D40M00S	8287800241500	N 115055
07/06/77	2	MSS 8888*	90φ	B2200471232	N *****	N07D13M00S	E132D38M00S	8289600232500	N 115055
07/24/77	2	MSS 5888*	70φ	B2200480530	N *****	N07D15M00S	E132D41M00S	8291400223500	N 115055
08/11/77	2	MSS 8888*	70φ	B2200491762	N *****	N07D14M00S	E132D40M00S	8293200213500	N 115055
08/29/77	2	MSS 8888*	80φ	B2200510675	N *****	N07D14M00S	E132D14M00S	8295000203500	N 115055
09/16/77	2	MSS 5888*	70φ	B2200511337	N *****	N07D16M00S	E132D39M00S	8296800192500	N 115055
10/26/78	3	MSS 5M8M*	90φ	B3900450772	N *****	N07D13M34S	E132D37M05S	83023500461X0	N 115055
11/13/78	3	MSS 5555*	50φ	B3900560013	N *****	N07D13M05S	E132D38M56S	83025300461X0	N 115055

960mm 1 : 250,000

#### ②RBV

70mm 1 : 1,685,300

240mm 1 : 500,000

各国センター

- ①EROS アメリカ
- ②CCRS カナダ
- ③INPE ブラジル
- ④EARTHNET イタリア
- ⑤ALS オーストラリア

これらの写真は、注文後約1ヶ月で入手できます。急ぐ場合にはEROSセンターのみですが約2週間で写真を入手することもできますが、価格は3倍となります。

日本ではランドサットのデータの扱いは、下記の所でおこなっております。

(財)リモートセンシング技術センター 技術部

TEL 03-403-1761(代)

住所 〒106

東京都港区六本木7-15-17

ユニ六本木ビル 6F

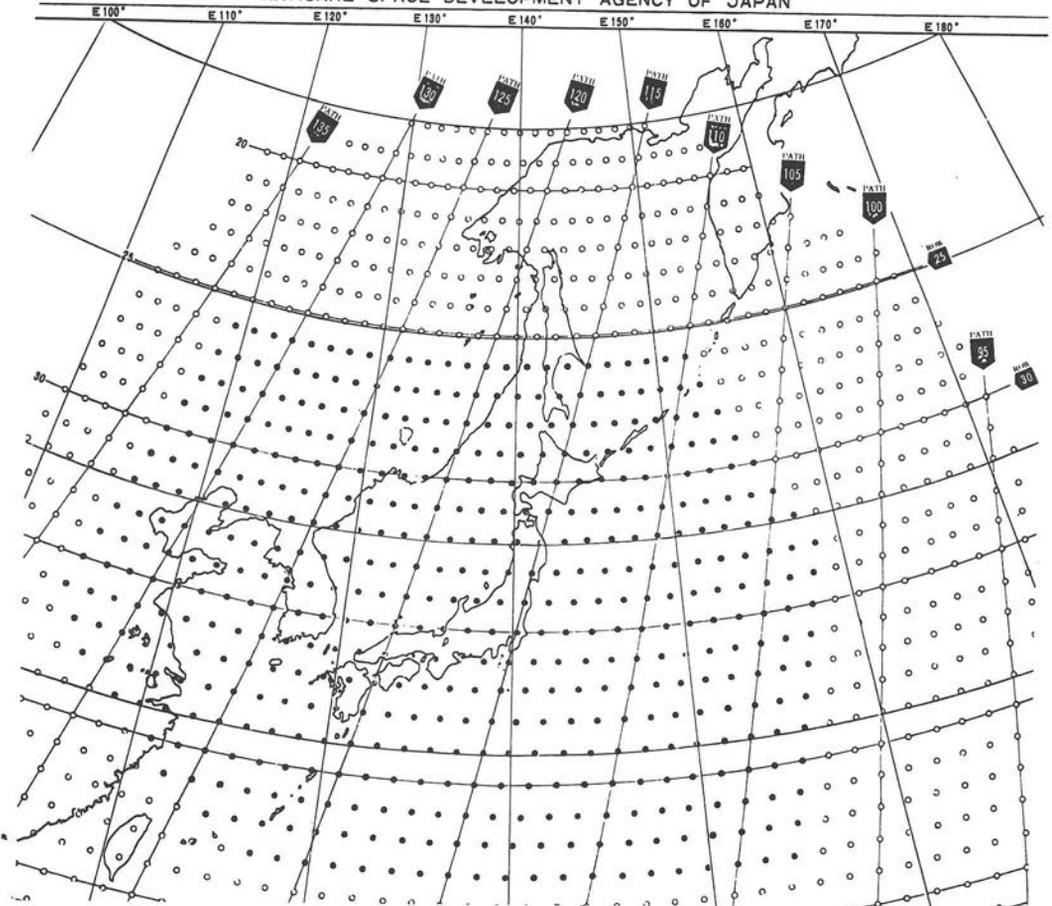
以上ランドサットの概要およびデータ内容について述べましたが、今後皆様の登山活動におきまして、何かお役に立つことがあれば幸甚と思っております。

(表-2) ¥¥カイガイ データ カカク (82.4) ¥¥

データ シュルイ	EROS	CCRS	INPE	EARTHNET	A L S
> M S S <					
B/W 70mm FILM POSI	3,000	15,000	14,600	---	3,700
B/W 70mm FILM NEGA	3,700	30,600	17,500	---	---
B/W 240mm FILM POSI	3,700	4,700	29,900	14,000	5,100
B/W 240mm FILM NEGA	4,400	---	---	18,700	---
B/W 240mm PAPER PRINT	3,700	3,900	17,500	11,700	4,600
B/W 480mm PAPER PRINT	7,300	9,400	38,600	18,700	9,100
B/W 960mm PAPER PRINT	12,800	16,400	75,800	28,000	16,400
COL 240mm FILM POSI	9,100	8,100	37,500	58,200	12,800
COL 240mm PAPER PRINT	5,500	7,300	29,900	46,600	7,700
COL 480mm PAPER PRINT	12,800	17,500	49,900	69,900	16,400
COL 960mm PAPER PRINT	25,500	32,800	---	93,200	36,400
CCT	103,400	79,300	199,900	151,300	113,700
> R B V <					
B/W 70mm FILM POSI	3,000	---	14,600	---	---
B/W 70mm FILM NEGA	3,700	---	17,500	---	---
B/W 240mm FILM POSI	3,700	4,700	29,900	14,000	---
B/W 240mm FILM NEGA	4,400	---	---	18,700	---
B/W 240mm PAPER PRINT	3,700	3,900	17,500	11,700	---
CCT	103,400	---	---	151,300	---
《COMPOSIT FEE》	27,300	0	0	0	0

\*CCRS ノ 70mmフィルム ハ 4 Bands/set アツカイノミ。

(図-1) **LANDSAT COVERAGE MAP**  
NATIONAL SPACE DEVELOPMENT AGENCY OF JAPAN



# 「高山病と高所生理学」

Dr. チャールス・S・ハウストン

西郡 光昭

はじめに、今回この研究会に私達（夫妻）をお招きいただき、共通する登山医学の話題についてディスカッションする機会を与えていただいたことにお礼を申し上げたい。特にDr、中島道郎の熱心なお誘いや、旧知の仲でありこの席の座長をされているDr、伊藤洋平に感謝する。

日本の登山家による長い歴史があり、特にマナスル以来、最近ではレベルの高い高所登山が行われていてそれだけ日本における経験の積み重ねが大きいわけであるからより良い意見交換が出来るものと念じている。

高山病の問題は古くから論じられ、ヨーロッパ・アルプスでのモンテ・フランの初登や、あの劇的なマッター・ホルンでのアクシデントの原因は何だったのかという裁判ざたにもなり得るテーマでもあったのだが、今回は高山病と高所生理学の若干の問題について触れたいと思う。

## 1. 高所障害のさまざま

高所障害の医学的な所見と、個々にあらわれるさまざまな病状とをはっきり区別することは不可能である。例えば急性高山病（AMS）や高所肺水腫（HAP E）、それに高所脳浮腫（HACE）はそれぞれが別々の人に発症することもあれば、同じ人に一度に現われることもあり、しかもその組み合わせや症状の程度もまちまちである。

これらはすべて個々人が置かれた環境によってもいいであろう。5,200m以上の高所に登る人の半数以上に眼底出血（HARH）が見られるという。その場合、ほかの高山病の症状が何もないただのHARHだけのこともあれば、ほか

の高山病症状と一緒に見られることもあるのだが、我々はHARHそのものはあまり問題にしないでいいと考えている。それはHARHが必ずしも脳内の出血を示すものではなからうと考えているからだが、その点はこれから研究をつめる必要がある。ただし出血部が黄斑部に生じた場合は例外である。

## 2. 高所障害の基本的メカニズム

我々は端的に言って、高所障害はどのようなタイプにしても、すべて修理不能なナトリウムのポンプの故障になぞらえることができると考えているこのポンプの故障は、細胞の中のナトリウムを増加させ（その反対にカリウムを減少させ）てその結果として細胞の中に水分が入りこみ、細胞が膨れる状態をつくりだす。これを浮腫（むくみ）というのだが、これは局所的（身体の一部）に出ることもあれば全身的にも出ることがあって、高所障害の徴候や症状の違いはこの浮腫の生じる部分と程度によってさまざまなのである。

## 3. 高所障害の予防と治療

もっとも有効な予防法は、改めていうまでもなくゆっくり登ることである——といってもみな皆、ゆっくり登れば高所障害を予防できるというわけのものでもないが、大量の水分摂取が有効であることに間違いはない。

それに薬を使う場合、AMSといわれる厄介な症状を予防するためには炭酸脱水素酵素阻害剤、アセタゾラマイド（商品名ダイアモックス）が最良と思う。これを250mg錠1回1錠、1日1～

3 回高所へ登る日とそのあとの1~2 日間服めば、たいていの場合AMSを予防することが出来る。しかしこれもH A P EやH A C Eにまで増悪した時点での効果は期待できないのではないかと思うが、これも今後より多くのデータを揃えて結論を出さねばならない。メドロキン・プロゲステロンという薬もあってこれは肺の換気を増大させるはたらきのあるところから予防に効果的だとされているが、若干女性化をひき起すといわれている。

また炭水化物だけの食事は高度にして7 0 0 m分だけ得をするといわれており、食事も投薬の手段と考えればこのほかに有用な投薬はないであろう。

それにしても最良の治療法は下へ下へと降ろすことである。わずかに7 0 0 m~1, 0 0 0 mの下降で早朝のH A P EやH A C Eは十分に回復させることができ、しかも酸素吸入よりも有効である。フロセマイド(ラシックス)、ステロイド(ベタメサゾン、デキサメサゾン)もH A P EやH A C Eに対して用いられるが、その安全性や有効性については若干、異論のあるところである。

日本の登山家はポータブルの加圧室などを利用しているそうだがそれらは有用だと思う。

#### 4. 高所障害の特色

高所では、睡眠中にチェーン・ストーク呼吸(無呼吸と嚔呼吸が交互にあらわれる)をするということはご存知の通りである。我々はこの無呼吸の間の動脈血の酸素飽和度はかなり低いということ、そしてそれが高所障害の重さの程度に関係すること。さらに先述のダイアモックスによってそれが予防または減少させることが出来るものであることを証明した。

我々は、生れながら肺動脈に欠かんがあるために低い高度でH A P Eに罹ったいくつかの症例から、そのメカニズム解明へのヒントを与えられているし、未だ証明されていないが顔面に冷たい風が当たることで肺動脈圧が低酸素の故に高くなってH A P Eを起すらしいことも知られるようになって来た。

またある学者達は、高所住民が低地で数日を過ぎた後、再び自宅へ戻った場合H A P Eにかかる

危険が普通の人より高いと主張している。

#### 5. 高所順応

これは0 mから急に登る場合、普通なら意識を失いか、死んでしまうような高度でも、人が住んだり仕事をする事が出来るようになる身体上の一連の変化をまとめたものである。

高所に順応すればどんな変化が現われてくるか。その限界はどの辺までなのかなどについては議論の多いところで、例えば6 5 0 0 m~7 0 0 0 m以上では衰退の方が順応よりも早く進むのはなぜかなどについても皆さんいろいろご意見があると思う。

”アルパイン・スタイル”と”極地法”あるいは”包囲法”と呼ばれる登山形式の比較でもいろいろな意見があると思うが、アルパイン・スタイルを採る登山家はそれまでにいくつもの高所での経験を積んでいる人がほとんどである点を強調しておきたい。逆に包囲法を取る場合にも、高所滞在日数が長ければ長いほど良いとはいえないということも我々の経験や実験の結果はつきりしていることを確認したい。

その他、高所なるがゆえに起る紫外線、凍傷(死)などの障害について触れなければならないが時間の都合で割合させていただく。

最後に、低地でも低酸素に起因する病気や障害には、肺不全症、ある腫の心臓病、嚔性線維症、肝硬変などがあること。3 0 0 0 m程度の山でも登ってはいけな病気に、狭心症、心不全、肺不全や日本にはほとんど見られないが遺伝性の貧血症などである。

われわれが高所経験で得た技術や知識が上のような障害を取り除くのに役立つことを期待したい。

以上の講演要旨はハウストン博士の当日用のレジュメ(訳:中島道郎博士)に西郡が若干補足したものであり、文責は西郡にあります。

第2 回日本登山医学研究会(会長:北博正氏、代表幹事:中島道郎、斉藤悌生両氏)は去る5月2 8、2 9日両日にわたり京都市で開催されました。

# VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM ⑤



杉浦 誠氏



和田 誠治氏



吉川 清一氏

## 稜朋会インド・ガンゴトリ登山隊

サトパント (7,075m)

バギラティ II (6,512m)

出席者 隊長 杉浦 誠  
副隊長 和田誠治  
隊員 吉川清一  
マネージャー 高橋広子  
聞き手 尾形好雄



高橋 広子氏

### 会の生立ち・創立10周年

—— 最初に稜朋会さんのご紹介からして戴きたいと思います。まず、生立ちなどからお話しして貰いましょうか。たしか、稜朋さんは緑山岳会から分かれたクラブと記憶しておりますが……

杉浦 はい、今年で丁度10年になります。昭和47年にあの当時の緑のリーダー、現役がそっくり抜けて創ったんです。結局、あの事件があって緑(山岳会)は都岳連から締出されてしまったんで緑(山岳会)に居ては山に登れないということで、それじゃ別なクラブを創って山に行こうとなったようです。もっとも僕なんか和田君とは同期なんです。あの当時は新兵だったんです。だから僕なんか何も知らないで上の連中がゴチャゴチャやってそれにつれてきちゃったような感じなんでそのへんの細かいところは解らないですね。

和田 まあ、その前からいろいろあったようですが、表向きは今言ったような事ですね。

—— 現在、会員の方はどのくらい居るんですか。

杉浦 名簿上は50名ぐらいですが、常時活動しているのは20名から30名の間ぐらいですかね。

和田 うちはオールラウンドの山登りをするオーソドックスな山岳会ですから、老若男女を問わず入会させてますからね。

—— オールラウンドということですが国内での山行形態は昔ながらのオーソドックスな山岳会のようなものですか。

杉浦 そうですね、沢登りや岩登りなど幅広くやっていると。流れそのものは、緑(山岳会)の時とかわらないですね。やっていることは。

—— 現在はボルダリングなどハードフリーに代表されるように山登りもいろんなジャンルに分かれてきておりますが、こうした中でクラブとして昔ながらのオーソドックスな山登りを指向していくことは、いろいろとやりづらい面があると思えますがどうでしょうか。

杉浦 うちの会でもそういうグレンデ通いの感じがする若い会員は多いですよ。只、そういうのを否定しちゃうと会が成り立っていかないような気がしますからね。

### サトパント南壁へ

—— 稜朋さんは前にムリキュラへ出かけてますよね。あれは何年でしたか。

杉浦 1976年です。

—— そのあとの遠征は、どこか出かけられているんですか。

杉浦 会としては、今回が2度目です。個人的にはP 29やトリスル、ボコダなどに出かけている者がおりますけどね。

—— 今回の遠征の発想などをお聞かせ下さい。

杉浦 当初は、短期間と少ない費用でバリエーションの要素を含んだ山を探そうということで、どここのエリアと言うんじゃなく、最初7人もいない数人でやってたところにテレーサガールの北東稜をまず選んだんです。あの当時はまだ登られてないし、何回か取り付いて敗退しておりましたから是非、登りたいと思ったんですが、一早く大阪の泉州山岳会が予約を取っていて駄目だと言うんでそれじゃどうしようかと言う事でメルーとかいろいろ候補に上げてきたわけです。

サトバントも候補に上げたんですが、いろいろ話しを聞いたらサトバントはインナーラインの中でまず100%許可が降りないだろうと言われましたので最初はサトバントは行きたかったけど希望の中に入れなかったんです。

一時、メルー峰を仮決定したこともあったんですが、メルーは初登されてるし、バリエーション・ルートからも登られてるので魅力に之しいんじゃないかと……それにあくまでもうちの会としては前回ムリキュラで6500 mぐらいを登ってるのでまあ、ケチな話しかも知れませんが一応、7000 mクラスへ行きたいと言う希望があったわけです。そんな訳で会としてもサトバントは行きたい山としてあって駄目で元々だから出してみようと言うことになったんです。

サトバントのバリエーション・ルートとなると南面と言うことになり、北西稜よりは南面を出そうと言うことになったんです。もともと、北面は小樽の方の会で行くので許可は降りないだろうから南面なら降りるんじゃないかと言うこともあったんですけどね。

申請を出してたら運よく降りましたが、まあ、降りるまでは半年以上もかかって非常に大変でし

た。

—— 計画書ではバギラティII峰も登ることになってますが、こちらのルートは初登ルートですか。

和田 そうです。

杉浦 ようするにバギラティに関しては、僕達高所経験が少ないので高度順化のためにブッキングした訳ですよ。登れても登れなくとも期間を2週間と決めて終らせることにしてますから登頂ルートは簡単なところと考えてます。まあ、あそこだったらうまくすれば全員登頂が出来ると思いますのでね。

バギラティはあくまで主目的とする山でないので2週間経ったらサトバントへ移動してサトバントを集中的にやると言うことなんです。

そんなんで、バギラティII峰でなくてもケダルナート・ドームなどでも良かったんですけど、一杯で許可が取れなくて結局、女子雪氷が行ったバギラティIIにしようと言うことになった訳で、最初からバリエーションを2つ登ると言う考えではありません。

—— サトバントのようにガンゴトリ氷河の奥まった所に位置する山は取りつくまでのアプローチが大変だと思いますが、トランスポートーションの工夫などはどうでしょうか。

杉浦 そうなんです。余り時間をかける余裕がないもんで考えさせる問題点があるんですね。結局、途中にキャンプを1つ増していく方法になっちゃりでしょうね。

—— このスワチャンド氷河の記録はどうなんですか。

吉川 スワチャンド氷河は真中までです。雪が30cm位かぶっていて氷河の状態は判らないと言うことなんです。写真は登嶺会のカルチャクンドからのしかないですね。

—— サトバント南壁はどんな壁なんですか。

杉浦 ほとんど行った人も居なくて写真も少なく余り詳しい情報が得られてないんです。ただ、かなり大きな岩壁帯である事は確かかなようです。

吉川 バギラティI峰に行った松永さんあたりに関いたら花崗岩がかなり崩壊しているらしいんですね。松永さん達もI峰のあそこ全部壁をやる

つもりだったらいいんですが脆くて駄目だったようです。それに懸垂氷河がボロボロ落ちるなどで敗退してるんですが、そうしてみるとあそこの壁もそんな感じがするんですがね。

—— ケダルナート・ドームの頂上からみたサトバントの南壁は黒々としてましたけどね。

吉川 そんならいいんですが、行ってみなければ判らんですね。

—— サトバントのタクティックスはどのように考えてますか。

杉浦 一応、南壁の弱点を狙って絶対的に成功率の高い登りかたと言うことでポーラ・システムになると思うんです。うちのグループではラッシュというのとは難かしいと思うので、フィックスもある程度張ったオーソドックスなポーラ・システムになると思います。

—— そうしますと前進キャンプは幾つぐらい予定しているんですか。

杉浦 一応、C・4まで考えてます。B・Cから離れていることと岩壁帯があると言うことで一応、C・4まで用意していくと言うことです。

## 自分達のヒマラヤを！

—— 先ほど高所経験者が少ないと言うことでしたが、経験者は和田さんだけですか。

和田 そうです。

—— 和田さんはトリスルに次いで2度目の遠征だと思いますが準備に携わっていてどうですか。

松浦 そうね、そう思わなくちゃー、辛い辛いと思ったらやれないね。

和田 やはり、こちらの方がおもしろいですね。僕は渉外をやらしてもらっているので余計そうなのかも知れませんが……

確かに苦労も多いんですが、逆に、自分で一番楽しいところをやっているんじゃないかと思った方がいいんですよ。

和田 僕の場合は、まず経験してみて、そして次の遠征は必ず自分の会と言う想いがありましたからね、それなりの事がある程度やったつもりでいたんだけど今考えるともっとやっとなら良かったと思いますね。只、もともとあの隊('78 HAJトリスル登山学校)は、それで良かった訳で

しょ、今度行く時は自分で行きなさいと言うことでしたからね。自分の会へ帰ってから行ったメンバーと言ったら安中さんぐらいでしょ、まあ、HAJで行ったり、連れて行ったりしている人はいますけど自分の会を連れていったと言う人はいないでしょ、そう言う面では僕なんか一番良い思いをしているんじゃないですかね。

—— そうですね。それこそがHAJヒマラヤ登山学校の目的とする事ですからね。

和田 それまで あのトリスル隊は意味があるんですよ。あれだけで終っちゃうんじゃない行っても意味がないんですよ。一人でも多く自分のセカンド遠征と言う人が出れば亡くなった野中さん(副隊長)や稲田さん(隊長)に恩返しが出来ると思うんです。それにおもしろいですよ。あう言う隊はあう言う隊でおもしろさがあるし、自分の会は自分の会でおもしろさがあるしね。

杉浦 どんな形であれ一度行ったことがある人と我々みたいに行ったことが無い者では知識の開きは相当ありますね。やはり、どんな形であれ一度行った人間が今回一人入ってくれ、頭に立ってやってくれたお陰で非常に渉外などいろんな事でかなりスムーズに運びました。若し、これで居なかったら、かなり違った面で大変なことがあったんじゃないかなと感じるからどんな形にしろ一度経験することが大事であることを痛切に感じました。

—— 将に百聞は一見にしかずと言った事でしょうか。

和田 まあ、いろんな意見がありますけど帰ってきたらおもしろかったと言う遠征であれば良いんじゃないですかね。

—— 吉川さんはいかがですか。

吉川 初めてなので訳が判らないですね。

—— 高橋さんはマネージャーとの事ですが送り出し側としてはいかがですか。

高橋 そうですね、やはり行くからには登ってきてほしいですね。

—— 今日は、お忙しい中お集り戴きましてありがとうございます。ご成功をお祈り致します。

# 西域の詩

水野 勉

キングドン・ワードの調べがまだ終らない。怠け者のせいでもあるが、いろいろと雑用やらが重なっているせいでもある。了承願いたい。しかし、前号のナムチャ・バルワにしてもけっして手を抜いているわけではない。自分としてはできるだけのことはしているつもりである。

けれども、これで「閑話」も54回となり、何回かは五百沢氏の文章が入ったとはいえ、殆んどがぼくが書いたのだから、自分ながらおどろいている。深田久弥氏が「岳人」に「ヒマラヤの高峰」を連載したのはたぶん15年ぐらいたから（前の机上談話も含め、その後の余滴も含めると）、それに比べたら問題にならないが、深田氏とぼくでは格がちがうから、ぼくとすればたいへん書いたことになる。年令からいうと、深田氏が「岳人」にヒマラヤに関する記事を書き出した年令に、ちょうどぼくがなってしまった。ぼくも老いた。しかし、深田氏のことを思えば、これからともいえる。がんばるつもりである。ぼくのように弱いものは声援を送って頂ければ、何とかやっていけると思う。

ぼくは少年の頃、詩が好きで、よく読み、また作った。幼稚な詩を並べて詩集を出したこともある。日本語のコトバのひびきを美しく思っているし、それにセンチメンタルな気持も持っている。

中央アジアにあこがれてから、西域をうたった詩を読むようになった。もちろん、中国風に読むのではなく、日本風に読んでである。日本の詩人も西域をうたっているけれども、最近はいざ知らず、だいたい西域を訪れたことがなく、想像でうたったものである。やはり、ぼくには中国人の

うたった詩が好みに合う。

しかし、学のない者にはどうして西域の詩集を手に入れるのかわからないまま、あまり読むこともなく、ときどき、いろいろな文章に引用される詩だけで満足していた。そのうち、シルクロードについて多くの本を書いている森豊氏が「シルクロードの詩」という本を出された。たぶん、もう十年も前になろうか。ぼくはこれこそ求めていたものだとはかり、入手して読んだ。もうすでに知っている詩も多かったが、それでもはじめて目にする詩もあった。しかも、一冊の本として西域の詩を読めるという楽しさ、便利さもあった。じつにありがたい本であった。

杜甫、李白、王維、李賀、岑参といった、すでに知っていた有名な詩人のほかに、多くの詩人の名も知ったし、それらのうたった詩も知った。この本はぼくにとっては、ほんとうに好ましい本であった。

十年かって一別す  
征路ここに相逢う  
馬首いずくにか向かう  
夕陽千万峰 (権徳与)

などもはじめて読んで感動した。最近ではNHKでも西域の詩をとりあげて、朗読された。だいたいが有名なものばかりであったが、耳で聞くというも、目で読むのとちがった味わいがあるものである。石坂浩二の声も悪くはない。有名な

君聞かずや胡笳の声最も悲し  
紫髯緑眼胡人吹く

之を吹く一曲なお未だ終らず  
愁殺す樓蘭征成の兒  
涼秋八月蕭関の道  
北風吹断す天山の草  
崑崙南月斜ならんと欲す  
胡人月に向つて胡笳を吹く  
胡笳の怨みまさに君を送らんとす  
秦山はるかに望む隴山の雲  
辺城夜々愁夢多し  
月に向つて胡笳誰か聞くを喜ばん

という岑参の詩など、声を出して読むとじつにいい。西域のさびしさがよく心につたわってくる。また韋莊の詩「長安の春」などは夢見るように美しく、はなやかである。

長安二月 香塵多し  
六街の車馬 声轡々  
家々楼上 花の如き人  
千枝万枝 紅艶新たなり  
簾間の笑語 自ら相問う  
「何人ぞ占め得たる 長安の春」と  
長安の春色 もと主無し  
古来尽く属す、紅樓の女  
ただいま いかんともするなし 杏園の人  
駿馬軽車 擁し將ちて去る

これはすでに石田幹之助氏の「長安の春」で紹介されているが、やはり美しい詩だ。ほれほれとする。

この森豊著「シルクロードの詩」をぼくは何度そのページをめくったことだろう。古い、はるかな西域の世界、それは現実にはないものだけれども、強い索引力でぼくらをひきつける。しかし、ぼくはこの本だけでは満足できなかった。もっとまとまった、多くの西域の詩を知りたかった。熱心にさがせば、日本にも岑参の詩集ぐらいあるはずだが、日常の雑務にとりまぎれて、なかなかお目にかかれなかった。

ところが、最近ふと東方書店のカタログを見ていたら、2冊の詩集が載っていた。「歴代西域詩選集」と「岑参集校注」である。前者はやや森氏

の著書と同じ傾向のものであるが、漢代から清代まで扱っていて、森氏が主として唐代を扱っているのと比べると、はるかに範囲が広く、明、清時代の詩人が目新しい。清時代には、中国人がシルクロードというか、西域をさかんに旅行しているから、詩が多いはずであるのに、いままで日本に紹介されなかったのは、やはり唐代の詩があまりにも有名であったからであろう。悲愴感はないが美しい詩もある。

天山積雪凍初融  
哈密双城夕照紅  
十里桃花万楊柳  
中原无此好春風 (裴景福)

などはどうであろうか。注もついていて便利である。漢文が苦手だったほくですら、なんとなくわかるから、諸兄はよく感じとれるであろう。発行所がウルムチというのもおもしろい。やはり、西域の詩は日本人ばかりでなく、中国人にとって興味があるとわかって、じつにうれしい。ここでも岑参の詩がもっとも多く掲載されているのだから誰の目も同じということだろう。

さて後者の岑参の詩集は、500ページをこす大冊で、詳細な年譜も付き、版本の説明がついている。よく読んでいないのでわからないけれども、岑参の詩はほとんど網羅されていると思われる。詩一つ一つについても、長い解説が付いているから、岑参の詩の好きな人にはありがたい本である。これは別に西域だけを扱ったわけではないが、西域の詩が大部分であるから、中国における西域に対する関心の強さがうかがわれる。

岑参は河南省の出身であるが、進士に及第し、西域に役人として勤務した。森氏は生没不詳と書かれているが、年譜では715年生れとなっている。35才から安西、北庭などに勤務し、42才まで西域にいた。最後に有名な詩を掲げて岑参を偲びたい。

馬を走らせて西来天に至らんと欲す  
家を辞してより月の両回円かなるを見る  
今夜知らずいづれの処にか宿せん  
平沙万里人煙を絶つ

# 神話と伝説の旅 —ネパール叢書—

日本ネパール協会編  
川喜田二郎・加藤千代著

遠くチベット高原の南端に在るH A Jブリクティ遠征隊に想いをせながらこの稿を書いている。ムスタン王国はカリガンダキの源流にあたる。ヒマラヤを縦断するこの流れに沿った街道はインド平原とチベット高原を結ぶ大動脈である。この動脈によってチベット文明は南進し、ヒンズー文明は北に進んだ。ある部分では両者は融合し、重層し、特徴ある文化を形成した。あるいは支谷にひっそりと古い文化が長期にわたって温存されてきた。本書はこのカリガンダキを舞台としている。

序の「伝説の背景を考える」は示唆多いものである。中・西部ネパールに豊富な足跡とフィールドノートを有する川喜田二郎氏のゆたかな洞察に早くもふれさせられる。素朴文化—巫文明、生層文化というとらえ方でネパールの各地域を見直すとは今までにない視野が開ける気がする。

第1部「マガル族の物語」は、著者が村人の理解のもとに実施したプロジェクトで知られるシーカ村で採取したものである。単なる聞き書きではなくしっかりした考証と経験に裏付けられている。「マガル族の祖先神話」やシャーマニズム、狩、穀物栽培などが収められている。注記が親切でありがたい。

第2部「伝説の旅」は、シーカの北方ガーサ村からムスタンとの国境までのいわゆるタッコラ地方に伝わる興味深い伝説で構成されている。この地方には、商業（交易）民族として知られているタカリー族が主として居住している。チベット文化圏とインド文化圏のはざまに位置するこの地方の文化は重層文化の典型であるという。「ダウラギリとお上人さま」、「カリガンダキの洪水伝説」他の興味尽きない伝説は著者の考察により昔語りにとどまらずに歴史や地誌の素材として駆使されている。終章近くの「ムスタンとジウムラン（ジウムラ）」

でこの秘境の伝説にふれている。ムスタン王国とジウムラ王国の戦いである。

1,000年の長期にわたり独自の文化を温存してきたムスタン王国は近い将来に藩王国の形態を消滅しネパール王国に完全に一体化するという。ブリクティ隊は登山成果はもちろん、文化的にも貴重な収穫を持ち帰ることだろう。

ムスタンへの踏査計画が具体化して3年、筆舌に尽しがたい経緯を経て入城が実現した。

めざすブリクティ（6720m）はチベットとの国境上に位置するというが、最近のBCからの便りによるとどの山をブリクティと特定してよいのか大いに迷っているという。

持参した幾種類かの地図も決め手にならないという。

この現代、地図の空白部をさまようことができるとは考えようによっては何と幸せなことか。

日本ネパール協会の主要な事業である「ネパール叢書」は、本書に続いて57年4月25日に「ネパールの人々—I」が刊行された。

本書についてはいづれ本欄で紹介したいが、この2冊を併せ読むことによってネパールの人々への理解が一層深まることだろう。

以前、H A J主催の研究会で訳者の田村真知子さんに「旅を豊かにするもの—フィールドワーク」というテーマでお話いただいたことがある。

山への道すがら何気なく通過して行くアプローチの小さな村々、そこにはそれぞれにゆたかな歴史と生の営みがあることを教えられたものである。

ネパール・ヒマラヤをめざす登山隊は多い。叢書はゆたかな旅をつくる上に大いに役立つことだろう。（い）

昭和56年11月10日 古今書院発行  
A5判 247頁 2,600円

## ■ 寸 感 ■

今春のネパール・ヒマラヤ登山も当協会のブリクティ隊を最後に幕を閉じ、替ってカラコルム登山隊の幕明けとなった。今年のパキスタンの日本隊は7隊と国別数では最も多い、然し、以前の登山隊数からみると著しい減少傾向である。ちなみに来年はナンガ・パルバットへ向う3隊だけと言う。この登山隊離れがどこに起因しているのか中国やネパールのお役人にも良く認識して貰いたいものである。(0)

## 事 務 局 日 誌 (6 月)

- 3日(木) '82年クン登山学校集会  
5日(土) 事務局打合わせ(稲田、山森)  
8日(火) " (於:浪江、稲田山森)  
10日(木) '82年クン登山学校集会  
14日(月) '82年クン隊の急性高所暴露試験実施(於:立川航空医学実験隊)

- 17日(木) '82年クン登山学校集会  
19日(土) ブリクティ隊帰国(沢藤、三笠、成見)  
20日(日) ブリクティ隊帰国(菊地、土谷)  
24日(木) '82年クン登山学校集会  
27日(日) '82年クン隊のけ梱包(於:HAJルーム)  
28日(月) 東京ヒマラヤ(於:HAJルーム、22名)

## ヒマラヤ No.129 ( ' 号)

昭和57年7月10日印刷 57年8月1日発行

発行人 柴田金之助  
編集人 尾形好雄  
発行所 日本ヒマラヤ協会  
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号

## 会費納入のお願い

昭和57年度(57.4.1 ~ 58.3.31)分会費の納入をお願いします。

当協会の年会費は前納制度になっております。猶予期間の6月末までに納入のなかった方には「前金切れ」のスタンプでお知らせしますので早急

に納入下さるようお願いいたします。

尚、引き続き8月までに納入されない場合、機関誌「ヒマラヤ」の発送を一時停止させて戴きますので予めご了承下さい。

## 「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より応募したものを、毎月一作ずつ掲載する予定であります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

### 《規定》

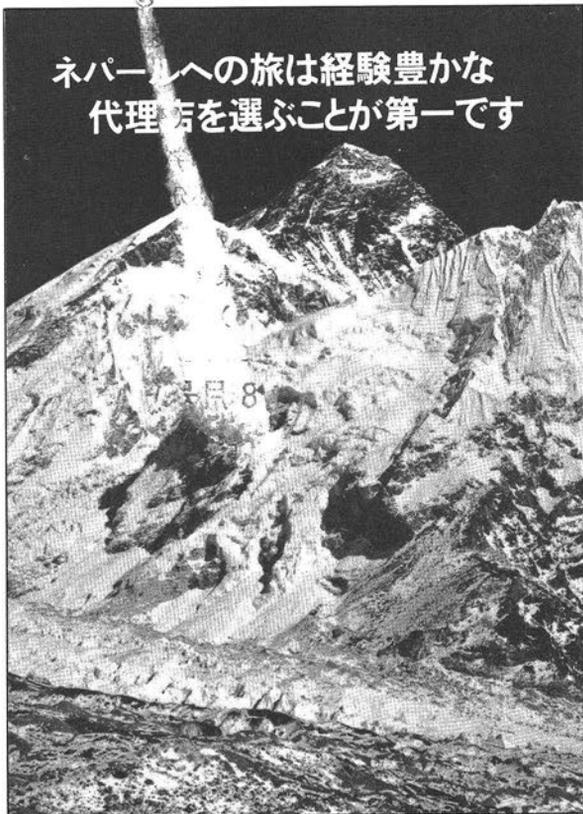
- (1) モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2) 被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
- (3) 未発表であること。

- (4) なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真(例:カラパタからのエベレスト)などは御遠慮下さい。

### 《送り先》

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号  
HAJ「ヒマラヤ」編集部

ネパールへの旅は経験豊かな  
代理店を選ぶことが第一です



■ヒマラヤ観光開発株式会社はネパール政府観光局  
指定インフォメーションセンター、ネパール  
航空日本地区販売代理店に指定されてお  
ります。

■ネパールへの個人旅行/トレッキング/パ  
ッケージ・ツアー/トレッキングで登れる  
18峰/登山の計画等、あらゆるご相談に経  
験豊富なスタッフがおりますので、安心し  
ておまかせください。

■ネパール国内ではトランス・ヒマラヤン・  
ツアー社/ホテル・エベレスト・ビュー/  
日本航空総代理店の業務を行なっており  
ます。

## ヒマラヤ観光開発株式会社

〒105 東京都港区新橋3丁目26番3号 会計ビル 5F  
電話 03 (574) 9292~4

# Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

“魅惑の  
インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン  
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・  
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！  
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、  
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR  
(MANAGING DIRECTOR)

**Shikhar**

TRAVELS PRIVATE LIMITED)

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031 4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



# ICI 石井スポーツ

至 中 野	至 池 袋	ICI山用品本店	至 池 袋
		ICIテニス用品	
大 久 保	新 大 久 保	ICIスキー用品 本屋	明 治 通 り
		大久保通り	
至 池 袋	至 池 袋	ICIサッカー・野球用品	至 新 宿

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル ☎03(200) 7219